

俳雑

第1回

【落語・俳句】

八木 忠栄

本欄では俳句に関する雑事を書いていきたいので、「雑俳」ところで「雑俳」という落語がある。雑俳に凝っているご隠居のところへ遊びにきた八つあんが「春雨」という題を出されて「船底をガリガリかじる春の鮫」と作る。「梔子」では「口無しや鼻から下がすぐに顎」。順次「顎無しや……」「首無しや……」「臍無しや胸から下がすぐに……」とつづける爆笑もの。

この哢を得意としたのは春風亭柳昇（昇太の師匠。2003年死去）で、何回も聴いた。俳句というより落語らしくバカバカしいが、飄々とした風格のある柳昇がヘタウマそのもので高座で演ると、独特な味わいを放つ。そのことを書いたら、柳昇本人からハガキをいただいた。「褒められているんだか、けなされているんだか、私に対する評は皆これです。私もあきらめています」。私はけなすというより、親愛をこめて書いたのだが。

古くから俳句や川柳をつくる落語家は少なくない。「駄句だく句会」に所属していた柳昇も俳句を作った。「あぢさゐを植ゑてわが庭狭くなり」は、ある公開ライブの席で、高名な俳人から高い評価をいただいた。